

はしがき

「餓死」や「孤立死」がときおり報道されるようになった。

このようななか、2013年1月に厚生労働省は生活扶助費を切り下げるとし、2013年8月以降からの生活保護費基準の切り下げが決定している。低所得階層との対比において切り下げが妥当と判断したとのことだが、はたして、切り下げられた基準は人が生活を営むための最低保障になりえるのだろうか。現に、食べるものも十分でなく、亡くなる人が存在する現実があるが、このような現実や実態を社会はどのように捉えているのだろうか。

生活保護基準部会の報告書（2013年1月21日）によれば、60歳以上の単身世帯では保護費が実際の消費水準よりも4.5%低い。この報告書からは生活保護受給の高齢者の暮らしは厳しい状況にあることが推測できるものの、生活扶助費の切り下げが一律に行われれば、生活保護受給世帯の4割を占める高齢者世帯の生活はいったいどうなるのだろうか。

このことは、高齢化に伴い「高齢者」を社会にとってどのような存在として捉えるかで大きく変化するものであろう。稼働しない高齢者は社会にとってのお荷物として、支えるだけで精一杯とするのか、あるいは、社会の公正な分配によって等しく分配を受けることができる存在とみなすのか。まさに、この日本社会はその岐路にあり、いまは方向性を模索している段階なのかもしれない。

高齢期の生活が所得保障いかんで大きく変化することはいうまでもないが、所得水準は高齢者の生活の延長線上にある「死」に続く日々の生活にも大きく作用する。筆者はこれまでに多くの高齢者の語りと向き合ってきた。その語りは、人が70年あるいは80年以上を生きるということは、自分自身を問うことでありながら、他者を問い、社会を問い、いわば悟りともいえる人生観や社会観、死生観を形成していることを教示している。

現代社会は、とすれば「個性」尊重を声高に掲げ、さまざまな存在、そこ

における価値の多様化・多元化などを容認する。しかしながら、その容認すること自体が、低所得高齢者の生活実態そのものや、あるいは彼らの人生観や死生観を捉える際に逆作用する。例えば、仕方がないこととしての容認やこのような生活もあるのか（他者の生活への不干渉）といった容認につながっていることに気づいていないのかもしれない。

本書では、低所得高齢者の生活の実態に着目し、その生活やその先にある死にゆきかたが、「尊厳」の観点から捉えたときにどのような課題を示すのかについて研究を進めたものである。所得の多寡によることなく、すべての高齢者がかけがえのない存在として生きることができるための議論の一助になれば幸いである。